

無住状態を考慮した複線的な集落づくり論
—時空間的な連続性のある都市農村戦略論の構築に向けて (1) —
Village Improvement with Double Track Considering Uninhabited Condition
-Urban and Rural Strategy with Spatial and Temporal Continuity (1)-

○林直樹* 関口達也** 杉野弘明***

○Naoki HAYASHI*, Tatsuya SEKIGUCHI**, and Hiroaki SUGINO***

1 本稿の目的

本稿の目的は、次の2点、すなわち、①筆者ら3名が提唱しようとしている「時空間的な連続性のある都市農村戦略論」に関する現時点での試論、②その各論の一つである「無住状態を考慮した複線的な集落づくり論」、石川県における無住集落の調査結果（無住状態で生き残っている集落）について紹介することである。

2 時空間的な連続性のある都市農村戦略論

筆者らは、現在の都市計画・農村計画では、時間的・空間的な連続性が欠落している、と考えている。あくまで試論であるが、表1・表2は「従来型の都市計画／農村計画」「時空間的な連続性のある都市農村戦略論」の違いをまとめたものである。表1は、近年話題になることが多いコンパクト化などに注目した場合の違い、表2は、やや抽象的なレベルでの違いである。

表1 コンパクト化・縮退・撤退に対する基本的な違い

Table 1 Basic difference in Reduction

	従来型の都市計画／農村計画	時空間的な連続性のある都市農村戦略論
空間	中心地（集約先）の整備だけに注力。辺地の将来像や次善策が欠落。	中心地（集約先）の整備だけでなく、辺地の将来像（次善策）についても考える。
時間	どこかにソフトランディングの「底」がある。「底」（事業完了時の地図）を示すだけ。	「底」はない。「個々人の対応力 \geq 全体の変化」となるようにコントロールする（激変緩和）。

表2 将来の捉え方に関する違い

Table 2 Basic difference in Future Assumptions

	従来型の都市計画／農村計画	時空間的な連続性のある都市農村戦略論
将来の捉え方	想定する将来は基本的に一つ。事業開始後の外的な変化には対応できない。	事業開始後の外的な変化に対応するため、複数の将来をあらかじめ想定。
ゴールと手段	「ゴール」（事業完了時の姿）、「使う手段」は一つ（一式）だけ。	複数の「ゴール」を設定。予備的な「手段」（状況によっては使わない手段）を設定。

* 金沢大学人間社会研究域 Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University ** 金沢大学理工研究域 Institute of Science and Engineering, Kanazawa University *** 東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

連続性、都市農村戦略、農村計画

3 無住状態を考慮した複線的な集落づくり論

極めて厳しい「山間地の小集落」における「時空間的な連続性のある都市農村戦略論」の例として、「無住状態を考慮した複線的な集落づくり論」を紹介する。

(一例) 当面は従来型の活性化をおこなうが、無住化が不可避と判断された場合は、再興の可能性が残る「無住状態でも生き残っている集落」に目標を切り替える。無住状態ですばらく(数十年)時間をかせぎ、好機が到来したら温存した力で一気に反撃に出る。¹⁾

注目すべきは、事業開始後の外的な変化に対応するため、複数の将来をあらかじめ想定していること、複数の「ゴール」を設定していることである。なお、枠内では示されていないが、最悪の事態を想定した「尊厳ある集落の完全解散」というものも考えておく必要がある。

4 無住状態で生き残っている集落：石川県の事例から

(1) 金沢市平町(大字)：活力ある無住集落

金沢市平町は、金沢市役所から車で約25分の山間地に位置する無住集落である。1995年国勢調査では「居住あり」であったが、2015年国勢調査では人口0人となっている²⁾。無住状態にもかかわらず、有人のパン屋(図1)や無人の直売所がある(2019年5月確認)。



図1 無住集落のパン屋
Fig. 1 A bread shop in an UNINHABITED village

(2) 金沢市畠尾町(大字)：静かな無住集落

金沢市畠尾町は、金沢市役所から車で約35分の山間地に位置する無住集落である。1995年・2015年の国勢調査の人口は、いずれも0人となっている²⁾。無住化からかなりの年数が経過しているが、やや古びた家屋だけでなく、比較的新しい家屋類も見られた(2019年5月確認)

(3) 若干の考察

前述の「無住状態を考慮した複線的な集落づくり論」の最大の疑問は、「無住状態で生き残っている集落」というものが存在しうるか、と思われるが、石川県での調査結果は、むしろ活力ある無住集落が見られるなど、そのような集落づくりの実現性を支持するものとなった。

謝辞：本研究はJSPS 科研費17K07998の助成を受けたものである。

【注】(参考文献を含む)

- 1) 林直樹「「撤退の農村計画」から「撤退の農村戦略」へ」『農業と経済』86(4), 37-46, 2020
- 2) (データについて) 人口：総務省統計調査部国勢統計課「1995年・国勢調査・4次メッシュのデータ」「2015年・国勢調査・5次メッシュデータ」より。大字のポリゴン：ゼンリン「行政区分地図データ2020」より。